

第六期長期計画市民会議（第3回）議事要録

■ 日 時 平成30年7月8日（日） 午前10時～午後5時

■ 場 所 武蔵野市役所 111 会議室

1. 開会

2. 議事

(1)事務局説明

【企画調整課長】 前回会議を踏まえて「分野に限らない全体を俯瞰した将来像、課題認識、各委員が最も重要だと考えている点」に関して発言いただきたい。

【H 委員】 武蔵野市の小中一貫教育の動きについて気になっている。少なくとも①教育内容、②学校施設の建替え、③学区変更や地域コミュニティと福祉との関わりなど、多分野に関わるテーマである。更に、考え方の違いやデリケートな部分もからむことで、検討・議論に時間がかかっていると感じている。効率的に議論を進めるためにも、庁内で横断的に知恵を出した上で交通整理をしていくことが必要ではないか。

【A 委員】 まずは「市民のために何が一番有意義か」ということを前提に考えることが必要。そのためには現場の声を引き上げてほしい。武蔵野市の市民力は高くボランティアが活躍しているが、ボランティアの質や、ボランティアに対する考え方が変化してきている。また、建物を建て替える時にはコスト削減のためにもデザイン重視ではなく機能性重視にしてほしい。

【F 委員】 ①人と人とのつながりを増やしていくこと、②そのための対話の機会を増やすこと、③そのために行政と市民が一緒になって考えて進めていくこと、という3点がどの分野においても重要になってくる。高齢者・障害者などの当事者と、そうでない人とが交流する機会をいかに増やしていくか。市民活動の中に、自然に障害者など多様な人が関わるのが促進していけると良い。また、転入者に対して個別のコミュニティのことを丁寧に紹介するなど、入りやすくながしていけると良い。例えば国際交流・防災など多くの年代の人が関心を持つテーマで、つながりを増やす・対話の機会を増やすことができると良い。武蔵野市の将来について子どもと大人と一緒に話し合う機会がつかれないか。それらを促進するためには行政によるコーディネートがある程度は必要になってくる。

【C 委員】 前回からさらに長期計画を読み込んだが、やはり非常によくできている。ただ、今後に向けては財政面で難しくなるのではないか。生産年齢人口の減少、高齢者の増加、公共施設の更新などの問題がある。すべての世代が満足することはもはや難しい。特に高齢者への優遇措置が大きすぎるため、これからの世代の中核になる若者及び子育て世代への優遇を強めるべきではないか。また、生産緑地の活用は、多くの課題に対する解決策になり得る可能性があると思う。第六期長期計画全体においては、しっかりと検討した上での選択と集中がさらに必要になってくる。

【G 委員】 日頃ボランティア活動する中で、来年度は実施されるのか未定の事業、カットされる事業が出てくる。それにより、つながりや対話の場が薄れていき、本来のビジョンである住み続けたいまちではなくなってしまうのではないかと危惧している。また、高齢者向け施設の中にも、目的や状況に即したものがあっても良いと思う。

【J 委員】 武蔵野市のコミュニティ構想の本来は、市政への市民参加であるはずだが、そこが少しズレてきているのではないか。コミセンのあり方もいま改めて見直すべきタイミングにきている

と思う。エリアや学区の線引きについても再検討の必要がある。また、武蔵野市職員の定数や嘱託職員の数をどうするか、削減の必要もあるのではないかと。高齢者への優遇はたしかに感じるが、その世代のスキルを活用することも考えたい。

【I 委員】 長期計画の設計が部分最適になっているのではないかと。全体最適で方針を考える必要がある。私自身、社会の閉塞感、若者の将来不安ということが常に頭にあるのでテーマとして取り上げた。新市長就任時の施政方針を見させて頂いたが、職員の方々はそれに沿ったすばらしい計画を立てていただいている。ひとつだけ若者に対する方針が抜けている様に思った。また、昨年5月に経済産業省の若手が『不安な個人、立ちすくむ国家～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか～』という、私の問題意識に近い論文を発表、ネット上で大きな話題になった。武蔵野市も「前例主義」や「混乱を避ける」のではなく、国や都の先を行く変革のリーダーになってほしい。

【E 委員】 自治体の最大の使命は、市民の幸せをどれだけ向上できるか、いい生き方を提供することだと思う。いま生きている世代を幸せにすることなく、将来への閉塞感はなくなっていくかない。その上で、武蔵野市の財政状態は他市に比べて良好であるので、その資源を活かしてほしい。コミュニティについては、最初のコミュニティ構想から、実質的には変化してきている。コミセンだけではなく、様々なチャネルを通じた市民参加を促進すべき。あとは細かい話だが、数十年後のことを考えるのであれば平成という元号はもう使わない方がよい。

【D 委員】 計画の一番の大元である市民協働・市民参加をどうしていくか。人間がそもそも持っている共感や思いやりという資質が、どんどん失われているのではないかと。前提に自然な思いやりがなければ、たとえば地域包括ケアシステムは構築できないはずだが、それが市民の中に本当に存在しているのか。どうしたら市民の共感や思いやりの力を取り戻せるか。

(2)グループ討議

- ・事務局より各分野の概要説明を行った。
- ・分野ごとに2グループに分かれてグループ討議を行った。
- ・各グループの討議内容は、以下のとおり全体に共有された。

子ども・教育

【総合政策部長】（グループ①の討議内容について）

「次世代に向けたビジョン・ありたい姿」として大きく2点に整理された。1点目は「地域で育てるまちづくり」を目指すこと、2点目は若者の観点を取り入れたビジョンである。「地域で育てるまちづくり」としては、「未来を担う全ての子どもが生き生きと成長できるまちづくりを目指す」「地域の宝を地域で育てる」「地域社会全体で見守り支援を行う」姿を目指すこと。若者の観点では「出生数増加が見込める若者向けの高等教育や職能教育の充実」を図ることが挙げられた。

「現状・課題」は、年齢別に整理をした。未就学児に関するものでは、子どもの安全・安心な成長支援や子育て家庭への支援が必要であること、子どもが夢を持てる教育になってない、「待機児童ゼロ」の達成は困難、園庭のない保育所に通う子どもの屋外の遊び場の確保、collabono（こらぼの）コミセン親子ひろばの運営の持続、などが課題として挙げられた。

小中学校に関するものでは、子どもへの期待が大きすぎて子どもも先生も非常に忙しくなっていること、学童クラブとあそべえの関係性が地域でも見えにくいこと、不登校の子どもへの対策の

充実、青少年の自立・成長の場を確保する必要、などの意見が出た。また、長期計画には青少協に関する記述が少ないのではないかと、ジャンボリーをより充実させていくべきと指摘された。学校教育で市民活動に関する内容を取り入れるべきとの意見もあった。また、私立学校に通う児童・生徒は地域との関わりが薄くなっているのではないかと、という課題も挙げられた。

高校以上の若者に関しては、大学卒業後も正規雇用されない人が増えており、彼らが年を重ねると問題化すること、職能やスキルの訓練が必要との意見があった。

「ありたい姿を実現するためには」としては大きく2点に分けられた。1点目は「地域で支える、人を育てていく」視点が必要であること。具体的には、アクティブシニアを含めたボランティアの活用、学校サポーターの充実、子育てセーフティネットの充実、次世代を担う学校教育機能の充実、地域と学校の交流促進などの取組みで、これらによって安心して地元で育て上げられるようにすることが必要とされた。2点目は「人を育てること」の視点。具体的には、学校教育においてシニアを活用すること、文化・人とのふれあいによって豊かな人間性を育むこと、collabono（こらぼの）コミセン親子ひろばに関わる人がその活動を通じて親としても育てていくこと、子どもと親の育ちを地域で支えるということ、などが方策として挙げられた。

【企画調整課長】（グループ②の討議内容について）

「次世代に向けたビジョン・ありたい姿」として、「子育てしやすいまちに住みやすいまち」というスローガンや、すべての子どもの育ちと学びを保証すること、子ども自身が考える力をつけられる教育を行うこと、多様化する子育て・教育に対する考え方や状況にしっかり対応すること、切れ目のない子育て支援が行われるべきであることが挙げられた。

「現状・課題」と「実現するためには」を合わせて紹介すると、まず「開かれた学校」であるべきだが実情は開かれていないとの指摘があった。開かれるためには、PTAにコミュニティを追加したPTCAにしたらどうか、学区・コミセン・地域社協のエリアを修正し重ね合わせてはどうか、といった提案があり、また、現場の先生・子どもの声をきちんと聞くことの重要性が指摘された。さらに、様々な知見やスキルをもったシニアの方々の力を引き出したり、学童やあそべえに地域の大人が入っていくことで地域の力を育てていくことが必要とされた。それと関連して、様々な場面を支える人材、地域社会、共助について改めて考えていく必要性も指摘された。

また、インクルーシブ教育やマイノリティの観点で、多様な性（LGBT）など子どもの頃からの教育をしっかり行うこと、多様性を持った方々と共に過ごす時間をつくる重要性、弱い立場の子どもたちの意見を聞いてそれを支援していくことが必要とされた。

現在、市では武蔵野市民としての市民性を高める教育として「武蔵野市民科」の取組みを進めているが、単に市を知るだけでなく、対話の促進や他世代交流によって市民参加につながる自覚を促すことを通して市民を育てる教育が必要で、市民としての当事者意識を持ってもらうためには、子どもだからこそ教育が大切、といった話があった。

小中一貫教育の検討に関しては、施設建替えのハード面と、教育内容のソフト面はきちんと切り離して考えるべきである、これまで市が行ってきた市民参加のまちづくりを継承して当事者の意見を聞くことが必要である、と指摘された。また、今後の学校は、コミュニティや福祉の拠点となり、防災面も含めてハードとしての機能を改めて見直していくことが必要という意見もあった。

学童クラブとあそべえは機能の違いを再認識すべき、市と子ども協会の責任をしっかりと整理し認識すべきとの話があった。また、あそべえも児童館のように児童福祉施設としてレベルアップしていく必要があるとの意見もあった。

不登校の課題に対しては、少人数学級のさらなる追加、0123 施設の児童館化といった提案が出され、また教員の多忙化も大きな課題として挙げられた。

切れ目のない子育て支援に関しては、市の子育て世代包括支援センターの検討に、フィンランドの「ネウボラ」というサポートの取組みを参考にしてはどうかとの提案もあった。また、待機児対策として保育施設・定員の数を増やす一方で、保育の質の確保も引き続き重要との意見もあった。

【D委員】 LGBTに関する補足として、愛知県の中学校で、トイレの改修と同時に、男子トイレ・女子トイレともに、全てを洋式化した（男子用の小便器をなくした）事例を紹介しておく。

文化・市民生活

【総合政策部長】（グループ①の討議内容について）

「次世代に向けたビジョン・ありたい姿」については、大きく3項目に整理された。1点目は、「活発な市民参加で豊かな社会」として、参加・つながり・協働、地域の市民活動が活発なまち、実行力を持ち続けるまち、多様性を力に、世代をつなぐ、という意見。2つ目は、「文化の薫りがするまち」として、まちの景観・緑を大事にする、3つ目は、若者に注目し、ハード・ソフト両面で若者が集い、学び、働ける環境という意見であった。

「現状・課題」で多く挙げられたのは、コミュニティについてである。人間関係の希薄化、コミセンのマンネリ化、団地・マンション住民のコミュニティへの参加の工夫が必要といった課題があげられた。市民参加については、行政からの働きかけが一定程度必要との指摘もあった。

「実現するためには」として、プレイスの活用や、「ワンミリオンサポート」と名付けられるような小規模な集いの場の支援があってもよいとの提案があった。コミセンを活用した就労・ライフプランなどの相談、さまざまなチャネルを通じた参加促進、新しいコミュニティ構想の必要性についても議論された。若者の視点から、若者の実態の把握（就労状況、賃金など）、将来に希望を持てるような社会づくり、貧困層への支援について言及があった。文化については、公共施設を活かすためにムーブスの路線の工夫、まちづくりでは、個性を活かしたまちづくり、まちの活性化、防災では、横のつながりの大切さ、昼間市内にいない層、昼間しか市内にいない層への対策の必要性などが提案された。他に、国際交流の活性化、武蔵境は外国人が増えているので外国人を活かしたまちづくり、またスポーツでは、障害者スポーツの普及などにより社会的包摂の考えを広めることが重要との話し合いがされた。

【企画調整課長】（グループ②の討議内容について）

「次世代に向けたビジョン・ありたい姿」では、市政参加の仕組みづくり、みんながみんなのことを考える、市民が自立して行動する力を付ける、社会教育・生涯学習、選択と集中、平和活動、グローバルとダイバーシティの先進都市、との意見が挙げられた。

「現状・課題」で多く挙げられたのは、まずはコミュニティに関してであった。誰かがやってくれるという感覚になっていること、コミセンとコミュニティは区別して考えるべき、といった課題に対して、「実現するためには」として、指定管理者制度の見直し、他のコミュニティにも目を向ける、自分のこととして考える、ボランティアの考え方の整理、新しいコミュニティ構想をつくっていくこと、ボランティア活動センターをつくっていくこと、情報提供・情報共有などの提案があった。また、コミュニティに関わることができる人は全体の一握りなので関わることができない人をどうするかという課題に対して、市の良いところを話し合っただけで共有できることが、普段関わりのない人の参加を促すのに重要との話があった。

その他では、産業振興の観点から、サポートというキーワードで、ワークライフバランスを先駆的に進める、働き方改革、地元産業の育成、大学が複数あるため学生や若者のスタートアップのサポート、経済面や家庭環境など様々な不利を抱える人がハンデを負わないようなサポート、などの取組みが必要との意見が出された。国際交流の視点からは、今の取組みの反面、外国人差別の解消への意識向上につながっているかという課題、国際都市への脱皮の強化、中身をきちんと考えていく必要がある、などと指摘された。防災については引き続き力を入れていく必要があること、防犯についても詐欺などの被害が多いことから対策の充実が必要との意見であった。平和の活動も引き続きしっかりと取り組んでいく必要があるとされた。

健康・福祉

【総合政策部長】（グループ①の討議内容について）

「次世代に向けたビジョン・ありたい姿」として大きく3点が挙げられた。安心していつまでも地域で暮らせる社会、「びんびんころり」、高齢者が主役の市政でなく若者主役の市政に、という意見である。

「現状・課題」では、まちぐるみの支え合いができるのか、高齢者の増加、認知症の増加などがあった。これらの対応として、健康相談ができるコミセン、皆が楽しく集える場所、地域のつながり、社会参加、福祉サービスの再編・ネットワーク化、医療・福祉の連携が必要との話が出た。

また、市単独での福祉サービスの対応は難しいのではという課題に対して、施設サービスなどで地方との連携も必要ではとの提案があった。

その他に現状・課題として、自殺対策の必要性、若者世代については貧困の連鎖をどう断ち切るか、15～35歳の健康診断、引きこもりなどが挙げられ、対策として、若者世代の実態調査の必要、行

政の連携、地域の医療の充実、世代別の予算を指標として若者向けに予算を移していくことなどが挙げられた。

【企画調整課長】（グループ②の討議内容について）

「次世代に向けたありたい姿・ビジョン」としては主に3点に整理された。1点目は、生涯にわたり安心して生活できる「生涯健康先進都市」、人生の最後まで暮らし続けられるまち。2点目は、高齢者だけでなく障害者や生活困窮者にも届く福祉、社会的包摂（共に生きるまちづくり）、まちぐるみの支え合いの仕組みづくり、地域共生社会といったビジョン。3つ目は、施策に近いが、市民社協と福祉公社との統合である。

「現状・課題」と「実現するためには」を合わせて紹介すると、最も意見が多かったのは「まちぐるみ」というキーワードの項目になる。健康寿命の増進に向けた全世代の社会参加、当事者同士の支え合い、ボランティアの高齢化に対して若い世代をどう引き込むかの仕組みづくり、アクティブシニアをどう増やすか、多世代の交流、協働による福祉のまちづくり、健康・福祉の専門ボランティア人材の育成、といった意見が挙げられた。

次のキーワード項目は、身近な相談窓口である。いろいろな課題が複層的に起こっているため丸ごとの相談対応が必要ということ、福祉が必要な人の相談を総合的に受け付ける場所が必要である。ただし課題として個人情報の問題があり、必要な情報を共有できる地域のつながりが重要という指摘、コミセンに市職員が出張してきて相談ができればとの提案もあった。

取組みの方向性として、小さなことから始められればということで、「ワンミリオン」の支援、小さなサポートが重要との意見が出された。行政としての役割は何か、現場の話を聞きながら進めていく必要、自助・共助・公助の役割の整理についても指摘された。

その他、高齢者だけではない障害者・子どもなど様々な分野も含めた幅広い福祉、子どもたちへの福祉教育によって裾野を広げていくこと、メンタルヘルスを健診に加えてクローズアップしていくこと、介護者の育成、成年後見の充実など多岐にわたる意見が出された。

(3)その他

・分野を俯瞰した全体ディスカッションを行った。

【企画調整課長】 全体ディスカッションの前に、午前中に欠席されたB委員から、他の委員と同様に前回は踏まえた全体的なご意見をお願いしたい。

【B委員】 1点目は、自然・文化・市民感覚など、いま持っている資源を維持・発展させていく意識と、それに安住せずにチャレンジしていく意識が大切だと思う。2点目は、市民の意識、言い換えればシチズンシップ・武蔵野プライドとは何かということを皆で考えていけるとよい。その上で、若者や女性に焦点を当てるべき。シニアの年代が活発に活動しているが、若者やミドル層が活躍できるように。例えば実家が武蔵野市だった若者が独り立ちしても市民として住み続けられるように。そして女性が様々な活躍をできるようにしたい。若者・女性に焦点を当てることを考えていけたらよい。

市民参加については、特定の人だけではなく、幅広い市民が緩やかにでも何らかの関わりを持つような機会をつくっていけるとよい。最後に、武蔵野市は財政など多くのプラス面があるので、東京や日本をリードするような市になってほしいと願っている。

【企画調整課長】 それでは、この後のディスカッションは、各委員の発言の共通したキーワード、特に「市民参加」「市民協働」「コミュニティ」「つながり」を掘り下げていくような形でご議論いただきたい。

【H委員】 日頃のコミュニティ活動での実感としては、50代・60代の社会参加が比較的抜け落ちているのではないかと。子育ての現役世代としては、70代・80代の方々からダイレクトにいろんな課題を任せられそうになっても、かなり負担に感じてしまう。

【D委員】 武蔵野市はマンション住民の割合が多いが、マンション住民の市民意識を聞いてみたい。無作為抽出のワークショップにも若い世代が多く参加したと聞いている。コミセンについては、運営にシニア男性が増えて、企業のルールが持ち込まれることで気楽さが失われているとの話も聞く。コミセンとはまた違った、もっと気軽に参加できる別の形のコミュニティも必要なのではないか。

【F委員】 武蔵野市に引っ越してきてコミュニティ関わるにつれて、つながりや関係性はありがたいものだ、という思いがある。何かしら豊かなもの・良いものが生み出されていくのが地域でありコミュニティである。では、どうすればマンション住民をはじめ人をつなげられるのか。コミセンだけでなくいろいろなチャンネルでつながる可能性がある。行政も含めて協働したまちづくりを進めていきたい。

【I委員】 財政は先細ることがわかっているので、選択と集中が必要で、シニア世代よりも若者世代に重点を置きたい。シニア世代にはお金をかけるよりも活躍の場を増やしていく必要がある。

【D委員】 若者は、SNSでつながるという感覚で、地域コミュニティのことが理解できるのか。高齢者から若者へ予算をシフトした場合、高齢者の貧困につながる恐れがある。いまの高齢者がお金を使わないのは老後が心配だからで、その不安が社会全体を縮めている。市としては、老後の不安を取り除き、高齢者も若者もいきいきと暮らせるようにするべきである。

【A委員】 自分の若い頃を思い返しても、当時は自分の生活で精一杯で地域に出てくることは難しかった。市政に興味を持つほどに困っていることが少ないのではないかと。いまの若い世代も必要を感じれば出てくるのかもしれない。若い世代がお金を使わないとは言いが、使い道（価値観）が違うだけではないか。コミセンの運営の難しさはあるが、新しいものを求めるだけでなく、今までの考え方の活用も必要。若い世代がコミセンにただ施設を借りにきたとしてもウェルカムにすることで、新しい人が気軽に参加できる雰囲気づくりが重要。

【I委員】 貧困の若者を支援すべきという意味ではなく、全ての若者に投資をするべきと言いたい。財政的に比較的余裕のある武蔵野市だからこそ、難しいテーマに取り組むべき。

【C委員】 自分自身、若い頃は市民参加ということに興味がなかった。今回の市民会議に参加して、行政がいかにか市民の意識・課題感を吸い上げようとする姿勢があるかわかった。委員の方々の意識も非常に高いと感心した。自分に何ができるかを考えたら、子どもへの教育に関わる活動なら関心がある。周りの仲間も巻き込んでみたい。自分の身近なところから始めたい。

【D委員】 もっと多様で小さな、そして自発的なコミュニティの活動が必要なのではないか。ミニコミセンのような居場所を増やし、そこで対話が弾んでいくことが市民参加につながるのではないかと。

【J委員】 コミュニティとコミュニティセンター（施設）はそもそも違うもの。その違いを理解した上で議論する必要がある。小さな居場所をつくる活動はたくさんあり、私もやっているが、まだ整理できていない縦割りの状態にある。武蔵野の魅力ってなんだろうと考えても、まだわからない。若い世代にとっては武蔵野市の様々なインフラが良いという。土地や家を持っているかどうかは市民条件ではない。様々な市民の立場で魅力を考える必要があると思う。

【E委員】 マクロ・統計で見た時に、市民の実態が見えてこない。市民参加にはいろいろな形態・関わり方があるし、様々なチャンネルがあって良い。気になるのは、家賃が高くて若い世代が暮らし続けられないこと、賃貸アパートの住民の割合が多いこと。人材流動性の高さ・不確実性を前提に計画をつくる必要がある。そのためにももっと実態を見る必要がある。

【B委員】 3つの提案がある。1つめは、「武蔵野市を考える日」をつくり、職場・学校や家庭で武蔵野市について考える。1日考えただけで市民としての意識が生まれるかわからないが、そんな機会があるとよい。2つめは、世代間のつながりをつくること。職場から代表を出してもらったり、地域や女性やシニアの方々が縦でつながって、いろいろな議論をする。その中で相互に気づきを得られると思うし、そこからリーダーが出てくるのではないかと。3つめは、武蔵野市が東京都や日本をリードする自治体であるために、若者・女性・ハンデを持つ方・シニアなど誰もがチャレンジできる風土をつくることで、そのメッセージを発信していけるとよい。

【G委員】 高齢者が生き生きと活躍する姿を見せられれば、若い世代もその背中に明るい未来を感じられるのではないかと。お金をどう使うかということではなく、子どもたちが豊かに育っていける環境を作ることで、人への思いやりも育ち、高齢化社会も担える人材育成につながるのではないかと。

【企画調整課長】 次回は主に報告書の内容について意見交換をしたい。その後の残りの時間で、これから立ち上がる策定委員会に託したいことを一言ずついただき、まとめにつなげていきたい。

もう一点、次回は策定委員会の委員を2名選出していただく予定。選出の基準は、市政全体を俯瞰する幅広い視点を持っていること、さまざまな年代の立場に立った視点を持っていること、市の将来を見据えた視点を持っていること、そして、さまざまな市民意見を踏まえて総合的な判断していくということ。この基準に合致していると思われる方について、辞退される方は除いた形で、皆様で決めていただきたいと考えている。なお策定委員会の男女比を考慮して女性から少なくとも1人は選出いただきたい。

以上